2025 年度終了報告書

社会技術研究開発事業
SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム
（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）

新生活に伴う孤独リスクの可視化と一次予防

研究開発期間：2021 年 11 月 1 日～2026 年 3 月 31 日

研究代表者：
柳澤邦昭（神戸大学大学院人文学研究科　准教授）

主たる実施者：
中井隆介（京都大学人と社会の未来研究院　特定准教授）
阿部修士（京都大学人と社会の未来研究院　教授）
中島健一郎（広島大学大学院人間社会科学研究科　教授）
早瀬　良（中部大学生命健康科学部　准教授）
杉浦仁美（近畿大学経営学部　准教授）

1. 概要

1-1. 研究開発および計画の概要

社会的孤立・孤独は心身の健康に深刻な影響を及ぼすことから、その理解と対策は喫緊の課題となっている。しかし、孤独であることを当事者が恥じらいを感じて表出しにくい側面があるため、孤立・孤独に陥っている人を把握することは容易ではない。さらに、コロナ禍を背景に他者との接触機会が制限された時期には、そのリスクが社会全体で高まり、不可視性はより顕著となる。こうした背景のもと、本プロジェクトでは、社会的孤立・孤独を多面的に理解し、リスクの可視化および予防的な社会的仕組みの構築を目指して研究開発を実施した。研究開発要素「①社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出」、「②人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法（指標等）の開発」、「③社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み」の三要素を一体的に推進し、概念実証（PoC）までを見据えた体系的な研究を展開した。

研究開発要素①では、大学入学時などの新生活期に焦点を当て、Web 調査や fMRI 実験、SNS データ、ウェアラブル端末データなどを統合的に活用し、個人要因と状況要因の相互作用が孤立・孤独の形成にどのように関与するかを検討した。研究開発要素②では、得られたデータをもとに、機械学習を用いて特定個人や集団の孤立・孤独リスクを予測・数値化する検出モデルの開発に取り組んだ。研究開発要素③では、開発した検出器を大学機関との連携を通じて運用を試み、PoC（概念実証）としてその有効性と社会実装可能性を検討した。あわせて、各大学の取り組みの中から社会的孤立・孤独予防に対し有効な施策を特定し、他大学でも実践が可能となるようベストプラクティスの作成に取り組んだ。

なお、戦略会議の助言を踏まえ、検出器とベストプラクティスを他大学展開を前提に再構成した。これにより、成果の汎用性と持続可能性を高め、社会的孤立・孤独の予防に向けた実践基盤を確立した。

1-2. 成果の概要

1. 孤立・孤独メカニズムに関する新たな学術的知見

オンライン交流の検討：全国 60 大学、4,949 人を対象とした大規模調査の結果、コロナ禍における大学閉鎖期間中、オンラインでの交流が学生の孤独感を軽減する効果は限定的であることを明らかにした。

孤独の「負の循環」を可視化：経験サンプリング法により、社会的交流の不足が孤独感を強め、その孤独感がさらなる社会的交流の回避につながる「負の循環」の存在を示した。

孤立・孤独の認知・神経科学的基盤を解明：fMRI 実験により、社会的情報に対する認知構造が集団平均から乖離している際に、孤独感が高いことを示した。

2. 孤立・孤独リスクを可視化する検出器の開発と予防策の特定

リスクの検出器の開発：機械学習を応用し、将来的な孤立・孤独リスクを予測する検出器を開発した。大学新入生の入学時のデータから、約半年後の精神的健康状態を高い精度で予測できることを確認した。

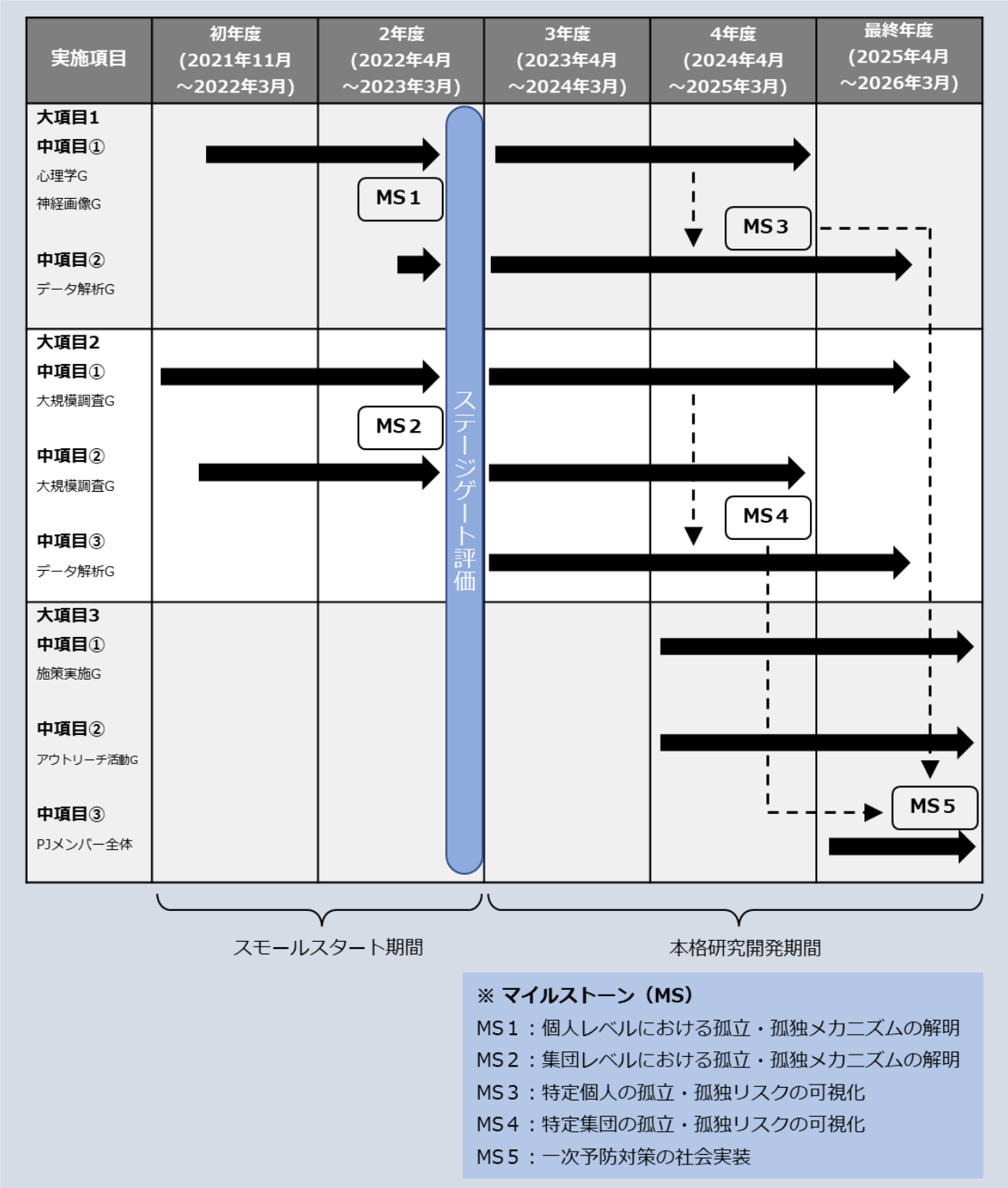
大学主導の交流機会の効果検証：縦断データ等の分析により、大学主導の交流機会が学生の孤独感の低減に有効であることを実証した。得られた知見に基づき、ベストプラクティスとして整理し、実装に向けた活用手引きへと取りまとめた。

3. 大学における効果的な孤立・孤独予防策の実践

検出器を用いた社会実装モデルの実践：リスクの早期発見から介入までを直結させる実践的な運用体制を確立した。具体的には、検出器によってハイリスクと判定された学生に対し、学生相談室が支援を実施する体制を構築し、優先度の高い学生を対象にカウンセラーが面談や支援を提供した。

2. 目的・目標の達成状況

2-1. 研究開発スケジュール



2-2. 実施項目毎の成果

(1) 多面的なデータを活用した孤立・孤独リスクの検出器の開発

1-①：孤立・孤独を規定する個人要因、状況要因の心理・生理学的検討

新生活における孤立・孤独メカニズムを心理・行動・神経活動など、多角的なデータで捉え、個人要因と状況要因の相互作用、その基盤となる脳内表象までを一体で検討した。その結果、経験サンプリング法による検討では、社会的交流の不足が孤独感を強め、その孤独感がさらなる社会的交流の回避につながる負の循環が観察され、孤独が行動の回避を強めるプロセスが確認された。また、fMRI を用いた実験では、社会的情報に対する認知構造が集団平均から乖離している、つまり、社会に対する考え方が多くの人とずれているときに、孤独を感じやすいということが示された（図 1）。さらに、SNS 投稿画像を用いた解析では、他者の投稿との類似性が高いほど孤独感が低く、類似性が低いほど孤独感が高い関係が示唆された。

これらの結果は、神経表象からオンラインでの行動に至るまで、共有性の低下（共通性からの乖離）が孤独感と関連することを一貫して示し、こうした特徴が社会的交流の減少と結びつき得ることが示唆された。したがって、孤独は単なる個人の選好に帰せられるものではなく、認知特性に起因するつながりにくさという側面を含み得ると考えられる。このメカニズムの理解は、つながりにくさを抱える人々が存在することを前提とし、当事者の自発的行動を待つだけでなく、社会参加の障壁を下げ交流機会へのアクセスを改善する予防的支援策を設計することの重要性を示唆している。

当初の想定を超える成果は、神経活動から SNS データに至るまで、平均的な特徴からの逸脱が一貫して孤独感の高さと強く関連することを、明確に示せた点である。成功要因は、それぞれのデータにおける共通性からの逸脱度を的確に捉えることが可能な分析手法を導入したことにあり、これにより、これまで捉えにくかった孤立・孤独の背景にあるメカニズムを浮き彫りにすることができたと考える。

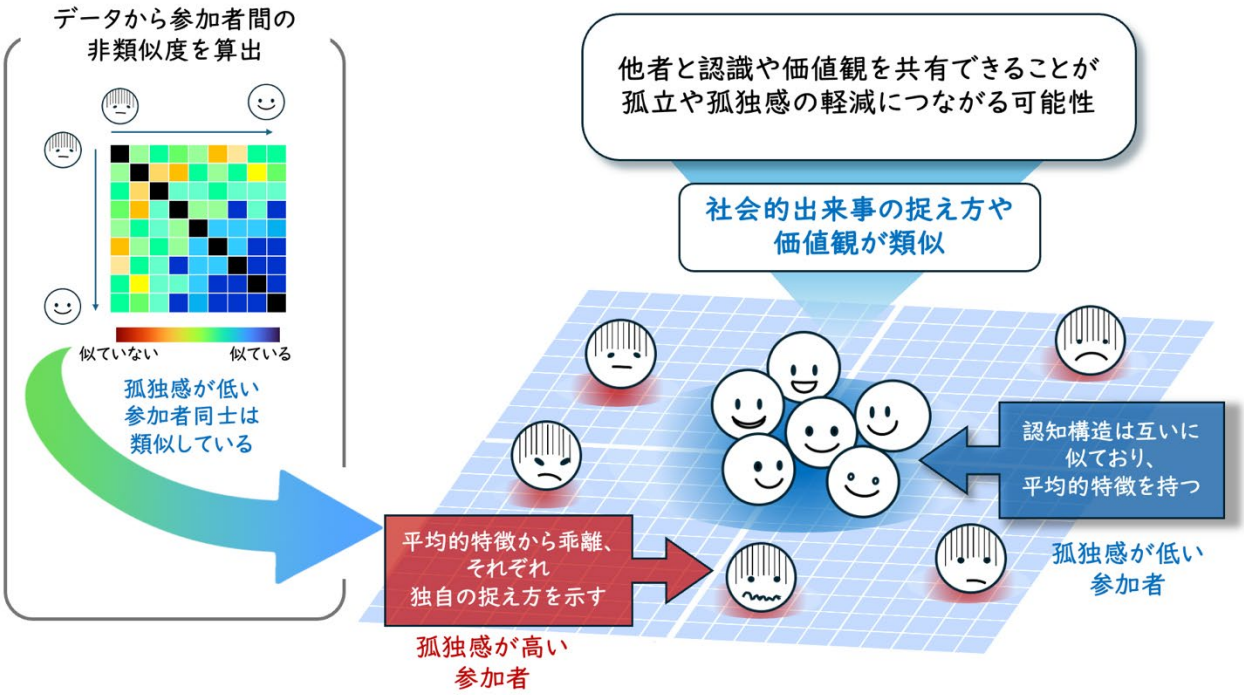


図 1　他者との認識・価値観の共有と孤独感との関係に関する模式図

1-②：機械学習を応用した孤立・孤独リスクの検出器の開発

実施項目 1-①および 2-①で得られたデータを活用し、機械学習を用いて個人の孤立・孤独リスクを予

測・数値化する検出器の開発に取り組んだ。モデル構築にあたっては、社会実装の容易さを念頭に置き、少数の指標で高精度な予測を目指すモデルの経済性を重視した。

その結果、大学新入生を対象とした縦断データに基づき、入学時における現在の孤立度（3 項目）、孤独感（3 項目）、身体的健康感（1 項目）という計 7 項目の指標から、約半年後の精神的健康状態（K6）を予測するモデルの確立に成功した。モデルの精度を検証した結果、実測値と予測値の間には中程度以上の相関が認められ、精神的健康状態が特定のカットオフ値を超えるか否かを比較的良い精度で分類できることが確認された。さらに、この予測モデルを実装したソフトウェアを完成させた（図 2）。

本開発の新規性は、孤立や孤独などの社会的指標をもとに、将来的な精神的健康リスクを予測可能な対象として捉えた点にある。特に、最小限の指標で精度良く将来の精神的健康状態を推定できる実用的モデルを構築したことが独創的である。また、現場で得られた制約や運用知を研究に還元し、モデルの改善につなげることで、研究と実践の往還を通じて新たな予防的視点を提示することができたと考えられる。

上記の成果が得られた要因として、対象の大学において全学規模で複数回の縦断調査を実施できた点が挙げられる。これにより、孤立、孤独や心理的健康の変化を把握でき、検出器の開発に必要な学習データの量と質を確保することができた。また、十分なデータに基づいてモデルの性能評価を繰り返し行うことが可能となり、カットオフ値や運用基準についても科学的根拠に基づく検討を進めることが可能となった。

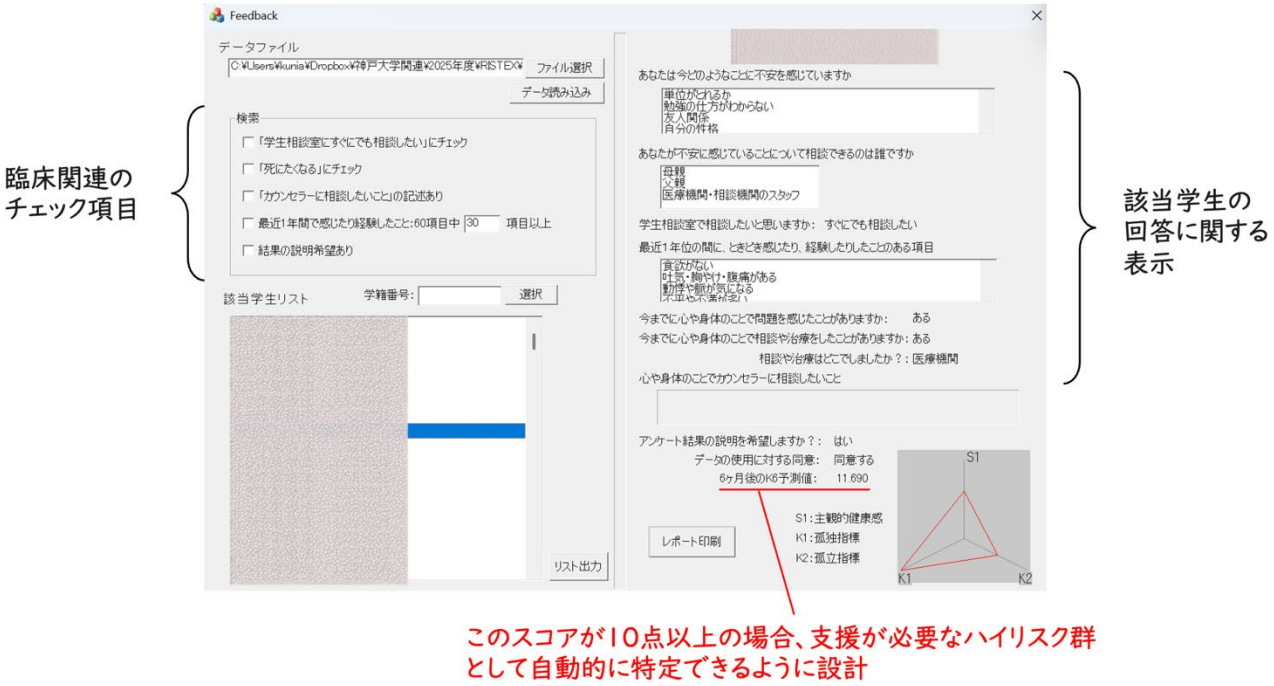


図 2　開発した孤立・孤独リスクの検出器（ソフトウェアの画面）

（2）特定集団の孤立・孤独リスクの可視化

2-①：大学生を対象とした大規模 Web 調査の実施と集団数の拡充

大学生の孤立・孤独に関わる個人要因および環境要因を包括的に把握することを目的として、個人（学生）データと集団（大学）データを連結した大規模 Web 調査を実施した。特に 2022 年度以降は、毎年 50 大学以上を対象とした継続的調査体制を確立している点が本プロジェクトの大きな特徴である。

主な成果は以下の通りである。まず、大学が集団レベルで提供する取り組みが、学生個人の孤立度に直接的な影響を及ぼすことが明らかとなった。特に、新入生と在校生の交流企画を実施している大学では、そうでない大学と比較して学生の孤立が低いことが確認された。この結果は、大学側が意図的に設ける交流の場が、学生が日常的に助け合いや雑談といった関係を築く上で極めて有効であることを示しており、これまで十分に検討されてこなかった制度・環境レベルの要因が個人の孤立度に影響することを明らかにした点で独自性を有する。また、学生に友人関係を築くきっかけを自由記述で尋ねたところ、多くの学生が新入生オリエンテーションや学科交流会といったイベントを挙げる一方で、グループワークを伴う授業やゼミなども挙げていた。このことから、関係構築を主目的としない授業や教育活動であっても、学生の孤立を防ぐ上で副次的かつ重要な役割を果たしていることが示唆される。こうした結果は、教育環境の設計そのものが学生の社会的適応に寄与しうることを示す点で、新たな視座を提供している。さらに、コロナ禍における大学閉鎖が学生の孤独感に与える影響を分析したところ、大学閉鎖期間中に友人や家族とのオンライン交流頻度を増やしても、孤独感の軽減効果はほとんど認められなかった。この結果は、オンライン・コミュニケーションが対面交流を完全に代替することは困難であることを示し、大学主導による対面での交流企画や活動が学生の精神的健康を支える上で極めて重要であることを裏付けるものである。

本研究の成果は、従来の孤独研究が主として個人要因に焦点を当ててきたのに対し、大学という制度的環境が学生の孤立や孤独感に及ぼす影響を全国規模で実証的に明らかにした点にある。こうした検討を可能にした要因として、継続的なネットワーク形成により、毎年多数の大学との協力体制を拡充・維持してきたことが挙げられる。この全国的な連携基盤の構築により、大学間における制度的差異を統計的に検出し、環境要因を精緻に分析することが可能となった。

2-②：機械学習を応用した集団の孤立・孤独リスクの算出

上記 2-①で取得したデータをもとに、大学などの集団レベルにおける孤立・孤独リスクを予測・数値化することを目的として研究を進めた。具体的には、特定個人の孤立・孤独リスク検出器の開発で得られた手法を応用し、各集団の孤立度（e.g.，大学ごとの孤立指標スコア）や孤独感と、組織的特徴（e.g.，新入生と在校生の交流企画の有無）との関係を機械学習によりモデル化することを試みた。このモデルにより、新たな集団の特徴データを入力することで、その集団に所属することが将来的に孤立・孤独を高めるリスクを予測・定量化することを目指した。さらに、大学組織の特徴を分析し、孤立・孤独予防に効果的な取り組みを抽出して一次予防策のリスト化を行い、他組織への展開可能性を検討することも目的とした。

しかし、機械学習を行う上でモデルの安定的な構築に必要な大学数が十分に確保できなかったこと、また大学レベルで収集可能な定量的要因が限られていたことから、機械学習によるモデル化は実現しなかった。そこで、代替的なアプローチとして、特定大学内の学部間比較に焦点を当て、機械学習を用いずに集団レベルのリスク傾向を把握する方法を検討した。具体的には、中部大学の新入生データを用い、学部ごとの交流会参加率と半年後の平均的な孤独感の関連を分析した結果、参加率が高い学部ほど孤独感が低く、交流が少ない学部ほど孤独感が全体的に高い傾向が確認された。

さらに、縦断調査等によって得られたデータを活用し、孤立度や孤独感の変動パターンを分析することで、リスクに影響を与える要因を特定し、効果的な介入方法の方向性を整理した。これらの分析を通じ

て、孤立・孤独予防に有効な取り組みを抽出し、一次予防対策として有効な取り組みを体系的に整理したプラクティス集を作成した。あわせて、他学部や他大学への応用可能性についても検討を行い、その方向性を整理した。したがって、本研究では、大学単位の孤立・孤独リスクを予測するモデルの構築には至らなかったものの、小規模単位における組織的特徴や時間的変化が孤独感に影響する可能性を実証的に示し、予防的施策の設計に資する基盤を形成した。

(3) 孤立・孤独予防の施策の実施

3-①：特定の大学を対象とした孤立・孤独リスクの検出器の活用

本プロジェクトで開発した孤立・孤独リスクの検出器の実用性と応用可能性を検証するため、特定の大学において実践的な活用を進めた。具体的には、中部大学の 1 年生を対象に、入学初期に実施されている既存の学生相談室によるアンケート調査に、検出器の入力に必要な孤立・孤独感指標や身体的健康感に関する項目を追加した。調査にあたっては、大学 1 年生を対象にチラシを配布し、回答を広く呼びかけた結果、2,619 名（1 年生全体の 9 割超）から回答を得た。これにより、大学全体を対象とした包括的なデータ取得が実現し、孤立・孤独のリスクを定量的に把握する仕組みを導入することが可能となった。

得られた回答データを検出器の分析ソフトウェアに入力し、半年後の精神的健康状態の予測値を算出したところ、リスクが高いと推定される学生 131 名を特定した。そのうち 72 名は、学生相談室が従来用いていたチェック項目だけでは把握できなかった学生であり、検出器の導入により、潜在的なハイリスク群を新たに抽出できることが確認された。

検出器によって特定されたハイリスク群の学生に対し、学生相談室のカウンセラーが連絡を取り、面談やフォローアップ等を試みた。面談では、学生の状況を的確に把握し、支援へとつなげるための枠組みを整えた。また、検出器のアウトプットと学生相談室の判断基準を統合的に運用する仕組みを整備し、大学組織内での早期発見から支援介入までの一連の流れを確立した。本成果は、大学現場における孤立・孤独の予防的支援の新たなモデルを提示するものであり、今後の他大学への展開にも資する実証的知見となった。

3-②：メディアを介した研究成果の発信

本プロジェクトでは、ウェブサイトを中核とした情報発信基盤を整備し、研究成果の社会的波及を図った。ウェブサイト上では、学術論文や学会発表に加え、孤立・孤独の実態や予防策に関する調査結果、大学で実践された支援・交流施策の紹介など、多面的な情報を掲載した。これにより、研究知見を社会的課題の解決に結びつける形で公開を進めた。また、情報発信にあたっては、一般市民、研究者、大学関係者など異なる立場の閲覧者を想定し、それぞれの関心や理解度に応じて内容や表現を工夫した。特に、研究成果を単に学術的に紹介するだけでなく、孤立・孤独の問題に関心をもつ幅広い層にとって理解しやすく、活用可能な情報提供を重視した。

さらに、2-②で述べているように、縦断調査等によって得られたデータを活用して、大学生の孤立度や孤独感の変動パターンを分析し、リスクに影響を与える要因を特定している。これらの分析結果をもとに、孤立・孤独予防に有効な取り組みを抽出し、一次予防対策として有効な施策を体系的に整理したベストプラクティス集をウェブ上で公開した。本プラクティス集では、新入生オリエンテーション、ピアサポート、他学年との交流会　など、大学組織のさまざまなレベルにおける実践的な取り組みを具体的に提

示している。特に、各イベントの実践内容を精査したところ、レクレーションをいかに効果的に取り入れているかが、学生同士の関係形成を促進し、孤立・孤独感の低減に寄与する重要な要素であることが明らかになった。そこで、レクレーションをテーマとした専用ページを新たに設け、交流イベントでのレクレーションの役割や効果、企画・運営上の工夫点、実際の実施手続きの流れなどを詳しく紹介している。これらを通じて、他大学や学生支援担当者が参照できる実践知として内容の充実を図った。こうした取り組みにより、レクレーションを媒介とした関係形成の促進という観点からも、孤立・孤独予防の取り組みを多面的に発信し、今後の大学における予防的支援の在り方を考える上で重要な基盤を形成した。

3-③：各大学における施策の実施と効果検証

本プロジェクトにおいて得られた成果に基づき、大学という生活環境の中で生じる孤立・孤独のリスクを、組織的な取組によって予防・軽減することが可能かどうかを検討した。特に、個人の心理的要因に焦点を当てるのではなく、大学組織の取り組みによって、孤立・孤独が生じにくい環境をいかに整備できるかを明らかにすることを目的とした。この目的のもと、上記 2-②で作成したベストプラクティス集を参照し、各大学において施策の展開を進めた。

ただし、各大学での実施を試みる中で、孤立・孤独予防を組織的課題として共有し、具体的施策を導入するには困難が伴うことが明らかとなった。特に、すでにそれぞれの大学で独自の学生支援体制や交流促進の仕組みが確立している場合、新たな取り組みを追加的に導入することが難しく、既存の枠組みとの調整が課題となった。

そのような中、神戸大学では、学年間のつながりを促進することを目的として、他学年交流会をプロジェクトメンバーが企画し、レクレーションを取り入れたイベントの開催を試みた。参加者が自然な形で関わり合える環境を重視して実施したため、定量的な効果測定までは行えていないものの、参加学生からの口頭によるフィードバックでは、交流のきっかけとして有効であったとの評価が得られた。こうした試行的な実践を通じて、孤立・孤独予防の施策を大学生活の文脈に沿った形で実装するためには、組織的枠組みだけでなく、学生が自然に参加できる活動設計が重要であることが示唆された。

2-3. プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. 孤立度・孤独感を高める個人要因、状況要因とは？

本プロジェクトでは、孤立・孤独感の形成要因を個人レベルと状況レベルの双方から検討し、神経活動・心理・行動データを統合的に分析した。その結果、従来の研究で指摘されてきたとおり、人生満足度や抑うつ傾向が孤立度・孤独感に強く影響する主要な個人要因であることが再確認された。また、新たな知見として、主観的健康感が将来の孤立・孤独リスクを予測する上で有効な指標となることが明らかになった。

一方、状況要因としては、日常的な対人接触の頻度や社会的交流の有無が孤立・孤独感の抑制に寄与することが示された。特に、経験サンプリング法による時系列データの解析から、社会的交流の減少が孤独感の上昇を招き、その孤独感がさらに交流を回避するという負の循環が確認された。これは、孤独感が社会的行動を促進するという従来の仮定とは異なり、孤独感がむしろ関係回避を強める方向に働く可能性を示すものである。

さらに、fMRI による神経活動データの分析から、社会的情報に対する脳内表象が集団平均から乖離し

ている、すなわち社会的情報に対する認知構造が多くの人と異なる場合に、孤独感が高まりやすいことが示唆された。また、SNS 投稿画像の解析においても、他者の投稿との類似性が低いほど孤独感が高い傾向が示唆された。これらの結果は、脳内表象からオンライン表現に至るまで、社会的情報の共通基盤からの乖離が孤独感の高さと一貫して関連を示す結果が得られた。これらの結果は、孤独感の心理的意味づけそのものを再考し、介入のあり方を根本から見直す必要性を示唆している。

Q2. 集団レベルの要因として孤立・孤独を促進・抑制する要因とは？

本プロジェクトを通じて、集団レベルの要因として、新入生と在校生との日常的な接触や交流の有無が孤立度・孤独感の抑制に重要な役割を果たすことが繰り返し確認された。また、大学ごとの文化的・社会的特徴が孤独感と関連しており、特に最小相互作用（e.g.，見知らぬ他者とのあいさつや短い会話）といった日常的な対人接触の機会が豊富な大学ほど、学生の孤独感が低い傾向が認められた。これに対し、そうした接触機会が乏しい大学では、孤独感が高まりやすい傾向がみられた。

これらの知見は、孤独感が個人の心理的特性のみならず、所属する集団の文化や雰囲気といった社会的環境要因の影響を強く受けることを示している。すなわち、孤独は個人の内的状態としてのみではなく、集団内に共有された対人関係の文化の中で生じる現象として理解する必要がある。今後は、こうした環境的要因に注目した分析をさらに精緻化し、組織・地域レベルでの孤独予防施策の設計につなげていくことが求められる。

Q3. 大学組織において効果的な孤立・孤独予防対策とは？

本プロジェクトでは、大学入学初期のデータをもとに、個人の孤立・孤独リスクを早期に予測・数値化可能であることを示した。こうした検出器の開発を通じて、孤立や孤独に起因する精神的健康の悪化が、入学初期の心理的状態に依存して早期の段階から形成される過程が明らかとなり、大学組織における早期把握および支援体制整備の重要性が実証的に示唆された。

また、これまでの分析により、大学組織が主導する社会的交流の機会が、学生の孤独感の軽減に寄与することが実証的に示されている。中部大学における調査では、入学時点で孤独感が高かった学生において、他学年との交流会、学科の懇親会・交流会、ピア・サポーターとの関わりなどが、半年後の孤独感の低下をもたらすことが明らかとなった。これらの結果から、大学組織における効果的な孤立・孤独予防対策としては、入学初期の心理的リスクを早期に把握し、組織的に交流機会や支援ネットワークを提供することが極めて重要であると結論づけられる。

2-4. プロジェクト間連携/若手人材育成/国際展開などの成果（任意）

(1) プロジェクト間連携

本プロジェクトの成果の一つは、領域内外の研究者との連携を主導し、学際的知見を結集する場を創出したことである。特に、本プロジェクトのグループリーダーである中島健一郎氏と研究代表者が共同で企画した、学術雑誌『心理学評論』の特集号「社会的孤立・孤独を広く深く捉え、つなげる」は、他プロジェクトの研究者にも執筆を依頼し、領域内の知見を結集したプロジェクト間連携の象徴的成果である。本特集の第 1 号は 2025 年 7 月に刊行され、第 2 号は同年 10 月に刊行された。

(2) 若手人材育成

本プロジェクトでは、次世代研究者の育成を重要な目的の一つに位置づけ、若手研究者や学生の積極的な研究参加を奨励した。その成果として、若手メンバーの主導により、非人間エージェントとの相互作用という新たな研究的視点に基づく研究計画が発案された。この計画は、RISTEX による予算の追加措置により実施されたものであり、コンパニオンロボット（LOVOT）とのインタラクションが大学生の孤独感に与える影響を検証することを目的としている。若手研究者や学生が研究の立案から遂行までを主体的に担うこの経験は、次世代研究者の研究遂行能力と創造的思考力の育成に大きく寄与した。

(3) 国際展開

本プロジェクトでは、研究成果の国際的な情報発信にも注力した。その代表的な成果として、学術誌 Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America（PNAS）に発表した研究論文（Yanagisawa et al., 2025）は、公刊後わずか 4 週間で 795 という高い Altmetrics スコアを記録し、国内外 150 以上のメディアで報じられた。特に、Nature、The Guardian、The Times、Scientific American といった国際的に権威ある科学誌および主要メディアで広く紹介され、本研究の知見が学術界のみならず社会一般にも広く届いたことが確認された。こうした広範な報道は、本プロジェクトの成果が孤立・孤独研究に関する国際的議論に貢献したことを示すものであり、特筆すべき点である。

3. 今後の計画および展望

本プロジェクトでは、大学生の孤立・孤独の実態を多面的に明らかにし、孤立・孤独リスクの検出器の開発および大学組織による予防策の効果検証を行った。これらの成果はすでに中部大学で実装され、入学初期のスクリーニングや学生相談室と連携した支援設計に活用されている。現状では、中部大学での成果報告を踏まえ、孤立・孤独予防の取り組みをピア・サポート活動と結びつける実践モデルの検討を進めている。それと同時に、他大学での導入を進める際に想定される課題やボトルネックを把握し、導入可能性をより具体的に検討するため、日本ピア・サポート学会でのワークショップにおいて関係者から意見を収集した。ワークショップでは、年度をまたいだピア・サポーターの確保（毎年度、一定数の希望者が必ずしも現れるとは限らない点）、安全管理体制の整備（サポーターと他学生とのコミュニケーションの齟齬や、サポーター企画の不適切な内容に対応できるトレーナー・コーディネーターの確保の難しさ）、そして教職員側の理解や支援の不足が主なボトルネックとして指摘された。また、こうした意見を述べた、学生によるピア・サポート・プログラムを導入している関西・中国地方の複数の私立・公立大学からは、実践モデルの導入可能性について個別に協議したいとの要望が寄せられ、今後具体的な協議を進めている。これらの取り組みを通じて、ピア・サポートを推進する他大学との協働や連携ネットワークの形成を進め、大学間でのベストプラクティスの共有と普及を図っていく。

今後は、これらの成果を持続的に社会へ普及させるため、本プロジェクトチームが中心となり、開発した孤立・孤独リスク検出器を軸とした孤立・孤独リスクアセスメントの導入パッケージを作成・体系化していく。現在のところ、本パッケージに加え、導入支援等の付加サービスを有償とすることで事業の継続性を確保することを検討している。導入マニュアルや評価指標の説明に加え、他大学が容易に導入・運用できるよう、データ入力からモデル更新までを半自動化した仕組みを整備し、環境に応じた最適化が行えるよう改良を進める予定である。これにより、大学間で孤立・孤独予防の取組を共有・標準化する基盤

が形成され、各大学が自学の特性に応じた支援体制を構築しやすくなるだろう。さらに、大学組織が抱える孤立・孤独課題の早期発見と一次予防が促進され、教育機関全体での学生支援の質的向上と持続的な展開が期待される。加えて、本研究の成果として作成したベスト・プラクティス集は、個別支援にとどまらず、大学制度や環境そのものを孤立・孤独を生みにくい構造へと再設計する「ゼロ次予防」の実現にも寄与すると考える。すなわち、組織運営・教育課程・キャンパス設計など複数のレベルで、学生が自然に関係性を築ける環境づくりを制度的に支える枠組みの構築が見込まれるだろう。

4. 計画・実施体制等の妥当性

4-1. 研究開発実施体制・効率性等

本プロジェクトの研究開発体制は、心理学、神経科学、情報学、保健学、看護学といった多分野の専門家が参画し、施策現場の関係者を含めた有機的な連携をその特徴とした。単なる異分野連携にとどまらず、学生相談室やカウンセラーとの協働を通じて、データ取得から予防施策までの一連の流れを円滑に推進する機能的な体制を構築した。孤立・孤独メカニズムの理解を目的として、神戸大学の心理学者が中心となり、広島大学の社会・集団レベルの研究者、京都大学の認知神経科学者との協働により、神経、心理、社会の各層を統合的に検討した。さらに、孤立・孤独リスクの可視化においては、京都大学の情報科学分野の研究者が機械学習モデルを構築し、ハイリスク学生の検出精度を向上させた。また、中部大学、大阪大学、岡山大学の看護学・保健学の研究者や病院の副看護部長らが参画することで、現場での実証研究を可能とし、研究成果を一次予防対策に直結させる体制を整えた。各機関・分野間では、オンライン会議や Slack などの情報共有ツールを活用し、迅速な意思決定と透明性の高い運営を実現した。このように、分野横断的な研究基盤と現場実装を結ぶ効率的な連携体制が、本プロジェクトの成果創出を支えた。

4-2. プロジェクトの運営・活動

本プロジェクトの開始時期は、新型コロナウイルス感染症の動向が極めて予測困難な時期と重なった。当初は静穏だった感染状況が急速に悪化するなど不測の事態が続いたが、プロジェクトメンバー間では、感染拡大という外的要因が孤独感に及ぼす影響を時系列で捉える機会と捉えた。オンラインツールを用いた緊密な連携体制を維持し、社会情勢の変化に即応しながら、感染静穏期から拡大期、そして再び落ち着く時期に至る全国規模のデータ収集を計画通りに遂行した。

研究側と施策現場側の相互理解を促進する契機となったのは、孤立・孤独リスク検出器の導入過程である。研究側は心理学的妥当性や予測精度を重視し、現場側は学生の負担や運用上の制約を懸念していた。双方の立場を踏まえ、プロジェクトのメンバーが協議を重ね、学生のスクリーニングに適した少数項目を採用した。これにより、運用負担を抑えつつ十分な精度を維持したモデルを実現し、研究と施策のニーズを両立させた。

本プロジェクトでは、大学生を孤立・孤独の課題に直面する当事者として位置づけ、その経験や意見を研究設計に反映した。プロジェクトの初期段階から学生の意見を積極的に取り入れ、指導学生や授業に参加する学生など、身近な学生たちに日常的に意見を聞きながら、彼らが感じる孤立・孤独の実態を多面的に把握した。これにより、研究者の想定だけでは捉えきれない、学生の実感に根ざした言葉や感覚を得ることができた。こうした当事者の声は、より現実に即した形で孤立・孤独を捉える基盤となった。

別紙

その他

1. 補足事項（任意）

1-1. コロナ禍における孤独感の分析

(1) 社会人を対象とした大規模Web調査の実施

新型コロナウイルス感染症の拡大が社会人の孤独感に及ぼす影響を把握し、その地域的特徴を明らかにすることを目的として、全国規模のオンライン調査を実施した。感染状況が落ち着いていた2021年12月下旬（新規感染者数が低水準）から、感染が急拡大した2022年1月下旬を含め、3月までの期間にかけて、月1回の調査を計4回実施した。都道府県単位でデータを収集し、20～30代の社会人を中心に、第1回5,544名、第2回4,752名、第3回4,278名、第4回3,932名の回答を得た。参加者は全国900以上の市区町村に居住しており、孤独感（Igarashi et al., 2019）や配偶者・友人・家族との相互作用頻度などを測定した。

分析の結果、配偶者（または恋人）がいない場合、また友人・家族との交流頻度が少ない場合に孤独感が高い傾向がみられた。また、第1回と第2回調査を比較すると、感染拡大期に孤独感が上昇することが確認された。さらに、Buecker et al.（2021）の手法を修正し、日本国内における孤独感の経時変化マップを作成した結果、西日本に比べて東日本で孤独感の上昇が顕著な地域が存在することが示された（図3）。加えて、地域をより細かくみると、たとえば静岡県内では東部よりも西部で孤独感が高い傾向が確認されるなど、同一県内でも地理的・社会的要因に応じた差が確認された。これらの知見は、感染拡大と社会的交流の制限が地域レベルで異なる形で孤独感に影響を及ぼす可能性を示しており、地域特性を踏まえた孤独予防施策の必要性を示唆するものである。

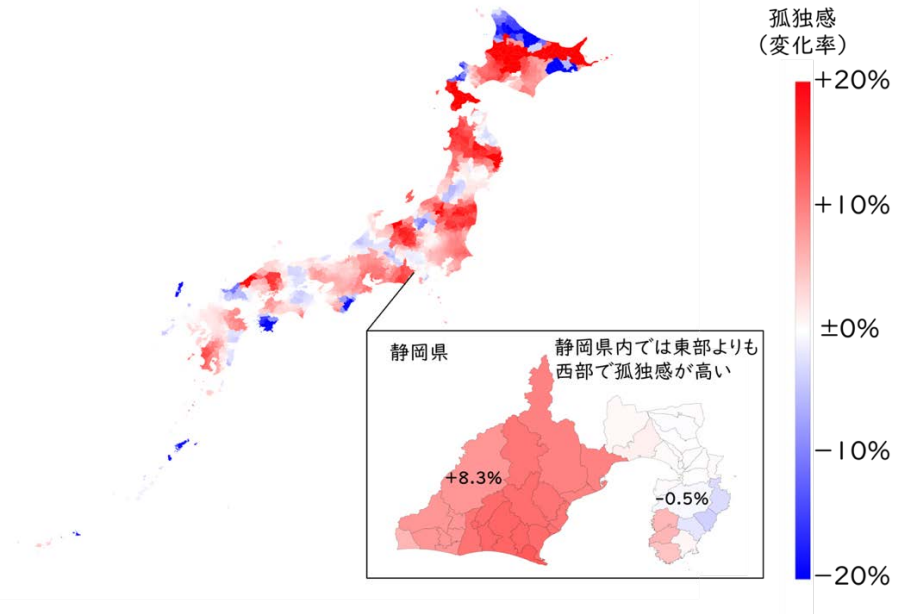


図3 孤独感の地域分布。参加者の居住地情報をもとに、市区町村の市区役所・町村役場の座標と孤独感データ（第1回から第2回測定における変化率）を対応づけた。これを基に、actor-based clusteringを用いて市区町村ごとの孤独感指標を算出し、その分布を地図上に可視化した。

(2) コロナ禍の大学閉鎖が学生の孤独感に及ぼす構造的影響

新型コロナウイルス感染症の拡大は、大学の休校や対面活動の制限を通じて、学生の社会的交流に大きな変化をもたらした。本研究では、こうした大学閉鎖期における若年成人の孤独感の実態と、オンライン交流が孤独感を軽減し得るかを明らかにすることを目的として、大規模調査研究を実施した。日本全国60の大学、短期大学に在籍する学生4,949名を対象に、COVID-19第6波の影響下である2022年4月から7月にかけて横断的調査を行った。分析には、心理ネットワーク分析およびDirected Acyclic Graphs (DAGs)を用い、大学が閉鎖されていた否かによって、学生を2群に分けて比較検討を行った。

分析の結果、全体としては、対面・オンラインいずれの友人交流も孤独感と負の相関を示したが、DAGsによる分析では、大学閉鎖状況によって明確な違いが認められた。大学が閉鎖されていない群では、友人とのオンライン交流が孤独感を低減する経路を形成していたが、大学が閉鎖されていた群では、この経路は観察されなかった。また、閉鎖されていない群ではクラブ活動やアルバイトといった社会的環境要因が友人との交流頻度に結びついていたが、閉鎖されていた群ではこれらの影響が消失していた。よって、社会的資源が友人関係を通じて孤独感に影響を与える構造が、大学閉鎖によって断たれている可能性が示唆された。加えて、閉鎖されていた群において孤独感を予測したのは、主観的健康感、対面交流の頻度、およびソーシャルサポートであり、オンライン交流の頻度は孤独感に直接的な影響を及ぼしていなかった。これらの結果は、オンライン交流が対面交流の代替にはなりにくく、むしろ既存の関係性を補完する形で機能する傾向を示唆している。したがって、本研究は孤独感の軽減を目指す上で、オンライン交流の「頻度」よりも「質」の重要性を明らかにしており、大学や教育機関が今後設計すべき介入策に対して、実証的な示唆を提供している。これらの結果は、*Asian Journal of Social Psychology*（AJSP）に掲載された（Kambara et al., 2025)。

1-2. 社会的つながりに関する認知神経基盤

(1) 楽観性と未来思考における神経表象の類似性

これまでの研究から、楽観性が精神的健康のみならず、身体的健康にも良い影響を持つことが示されている（Carver et al., 2010)。加えて、楽観性は良好な社会的つながりの形成・維持に重要な役割を果たすことも示されている（e.g., Brissette et al., 2002)。しかし、楽観的な人々がどのようにして他者と円滑な関係を築くのか、その神経メカニズムについては十分に解明されていなかった。本研究では、楽観的な人々が未来をどのように捉えているのか、その神経的特徴を明らかにすることで、楽観性と社会的つながりを結びつける基盤的メカニズムの一端を検討した。具体的には、参加者が自分自身または配偶者の未来の出来事を想像している際の脳活動を計測し、内側前頭前野における神経活動パターンの類似性を検討した。特に、研究1（37名）および研究2（50名）では、楽観性の高さによって未来を想像する際の神経活動パターンが他者とどの程度共通しているかを検討した。

解析の結果、楽観性の高い人々では、未来を想像する際の内側前頭前野における神経表象が互いに類似していることが明らかになった（図4)。一方、悲観的な人々ではこうした共通構造はみられなかった。さらに、楽観性の高い人ほど未来の出来事のポジティブさとネガティブさを区別する次元をより強く重視していることが示された。これらの結果は、楽観的な人々が未来を想像する際、感情的に意味づける過程において共通した神経基盤を有していることを示唆している。特に、楽観的な人々が良好な社

会的関係を築きやすい理由の一端を示している。すなわち、未来を捉える際の認知構造が共有されていることが、つながりやすさの基盤として機能している可能性が示唆される。これらの成果は、*Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*（PNAS）に掲載された（Yanagisawa et al., 2025）。

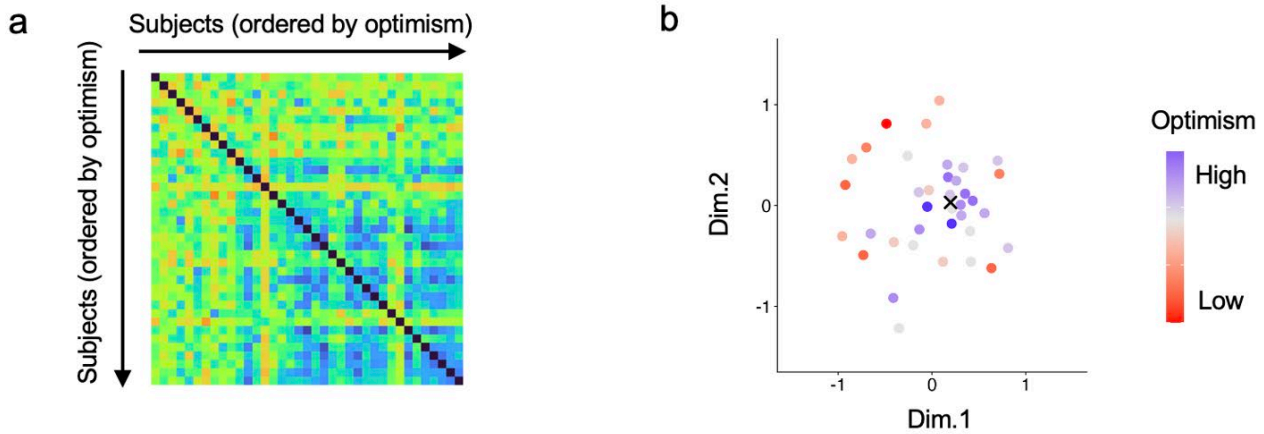


図 4 （a）参加者同士が未来を想像した際の神経活動パターンの個人間の類似性と楽観性の関連を示した行列。この行列は内側前頭前野で得られた脳活動パターンを基に作成されており、各参加者同士がどの程度似ているかを色で表している。行と列は参加者を楽観性の得点順（低→高）に並べており、左上の領域は楽観性が最も低い参加者同士の組み合わせ、右下の領域は楽観性が最も高い参加者同士の組み合わせを示している。暖色ほど神経活動パターンが似ていない（非類似度が高い）、寒色ほど似ている（非類似度が低い）ことを表す。（b）参加者同士の神経活動パターンの類似性を多次元尺度構成法（MDS）により可視化した。1 つの点が 1 人の参加者を表しており、点の色がその参加者の楽観性スコアを示している。参加者が最も集中している（密集している）領域を特定し、その中心を「×」で示している。なお、図は研究 1 の結果を示しており、研究 2 でも同様の結果が得られている。

（2）社会的認知構造と孤独感の関連

孤独感の特徴の一つに、自身の考えが他者と共有されていないと感じることが挙げられる（Russell et al., 1980）。近年の社会神経科学的研究は、孤独感の高い人々では出来事に対する認識や価値づけが他者と実際に異なっている可能性を指摘している（Baek et al., 2022, 2023; Broom et al., 2024）。本研究では、こうした孤独感に伴う認知構造の特異性を明らかにすることを目的とし、社会的および非社会的な出来事を想像している際の脳活動パターンに着目した。

大学 1 年生 55 名を対象に、社会的あるいは非社会的な出来事を想起する課題を用いて fMRI 実験を実施し、参加者の孤独感との関連を検討した。特に、内側前頭前野における脳活動パターンに着目し、各参加者の認知構造が集団平均とどの程度一致しているかを検討した。

分析の結果、非社会的な出来事においては孤独感との関連は認められなかったが、社会的出来事においては孤独感の高さと集団平均との類似度の低さが関連していた。すなわち、社会的な出来事を想像する際の神経表象が他者の平均的な構造から乖離しているほど、孤独感が高かった。したがって、社会的出来

事の捉え方が特異的であるほど孤独感が高いことを意味する。これらの結果は、出来事の意味づけや他者との認知的共有の程度といった心理的構造が孤独感と深く関わることを示している。本研究は、社会的出来事に対する認知構造のズレが孤独感の形成に寄与している可能性を示すとともに、孤独感を他者との認知的共有という観点から捉える新たな視座を提供している。

1-3. 他大学における社会実装に向けて

(1) 中部大学における縦断調査

本プロジェクトでは、孤立・孤独の予防として、大学生活全体における社会的交流機会の設計を重要視している。そこで本研究では、大学で実施されている多様な活動に着目し、それらへの参加が学生の孤独感に与える影響を検討した。特に、大学入学時点の孤独感を考慮に入れた上で、その後の交流活動への参加が孤独感の変化にどのように関わるかを分析した。

調査は中部大学で実施され、入学初期に測定した孤独感を基準として、半年後の孤独感を従属変数とした分析を行った。対象となった活動には、新入生オリエンテーション、学科の懇親会、留学生との交流イベント、ピア・サポートなど、学内で多様に展開されている交流機会が含まれた。

分析の結果、入学時に孤独感が高かった学生ほど、こうした交流会への参加が半年後の孤独感の低下に強く関連していることが示された。これらの効果は、複数の活動に共通して認められ、日常的な関わりの場が孤独感の軽減に寄与することが明らかになった（図5）。特に、入学初期の段階で孤立・孤独リスクの高い学生に対して、自然な交流を促す仕組みを提供することが、孤独感の一次予防として有効であることを示唆している。これらの成果に基づき、効果的な取り組みを整理したプラクティス集の作成を進め、他大学への横展開の可能性の具体化を図った。これらの取り組みは、孤立・孤独のリスク低減に向けた大学組織レベルでの予防的実践の設計に、実証的根拠を提供するものである。

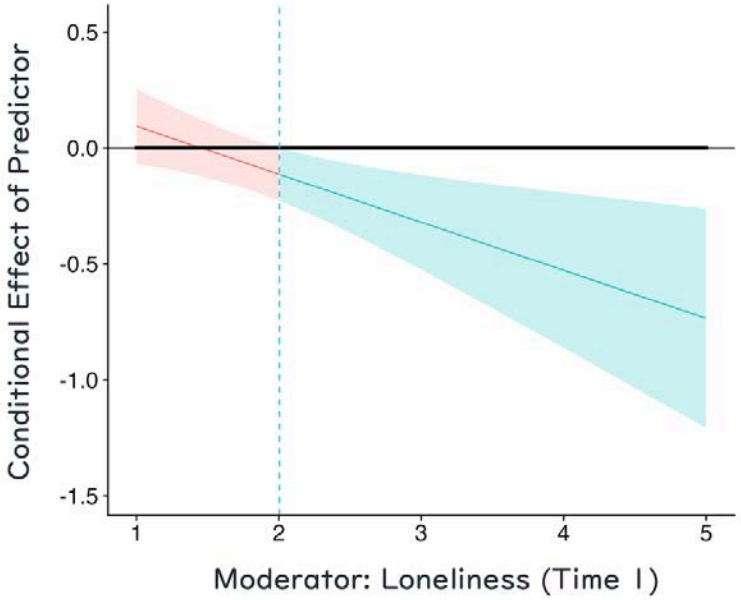


図5 入学時の孤独感（Time 1）を調整変数とした分析結果。横軸は入学時の孤独感、縦軸は他学年との交流会の参加の効果（半年後の孤独感への影響）を示す。入学時の孤独感が高い学生ほど、交流会への参加が半年後の孤独感の低下に強く関連していたことが示された。帯は95%信頼区間を示す。

(2) 孤立・孤独リスクの検出器の汎用性について

本プロジェクトでは、これまでに大学新入生を対象とした縦断データに基づき、入学初期の指標（孤立度、孤独感、主観的健康感）から半年後の精神的健康状態を予測する孤立・孤独リスク検出器の開発を実施した。この検出器の汎用化に向けた 2 つの取り組みを進めている。

第一に、検出器の適用範囲の検証である。これまで中部大学の学生データを基盤としてモデルを構築してきたが、本モデルをそのまま用い、他大学の学生だけでなく、社会人を含む 18 歳から 30 歳までの成人を対象に外部検証を実施した。その結果、5 ヶ月後の精神的健康状態の予測精度は、中部大学における精度と同等以上であることが確認された。したがって、この結果は、異なる集団に対しても安定した予測性能が得られることを示しており、本検出器が特定の組織や属性に依存しない汎用的なリスク評価ツールとして活用可能であることを示唆する。

第二に、他大学での使用を想定し、モデルの学習および再学習の自動処理に重点を置いたベータ版システムを開発している。このバージョンでは、導入機関が独自のデータをインプットすることにより、適切なモデルを提案できる設計となっており、大学ごとの特性に柔軟に対応できる運用基盤が整いつつある。

これらの取り組みにより、孤立・孤独リスク検出器は単一大学での運用から、多様な教育機関で導入可能な汎用性の高いモデルへと発展しつつある。引き続き、大学との連携を通じて、孤立・孤独の予防的支援の社会実装に向けた基盤整備を推進していく。

(3) 想定される課題やボトルネックの確認

「3. 今後の計画および展望」で述べたように、他大学での社会実装に際して想定される課題やボトルネックを把握し、実行可能な実装のあり方を精緻化するため、日本ピア・サポート学会第 23 回研究大会でのワークショップにおいて関係者から意見を収集した。ワークショップでは、年度をまたいだピア・サポーターの確保の難しさ、サポーター活動における安全管理の課題、そして教職員による理解や支援の不足がボトルネックとして指摘された。

さらに、孤立・孤独リスクの検出器については、ピア・サポーターやコーディネーター、学生相談室の担当者が、リスク予測値という個人情報をどのように管理・共有し、個別支援や組織的な予防的介入に活かしていくのかという、情報管理および倫理上の課題が懸念されることが明らかとなった。この点については、大学教職員や小・中・高等学校教員、NPO 職員など、所属の異なる関係者の間で共通の認識が形成されていることが確認され、併せて教職員を対象とした FSD 研修の重要性も指摘された。

一方で、本プロジェクトの取り組み自体が、ピア・サポート活動に関わる関係者にとって示唆に富む内容であることも再確認された。ここで挙げられた懸念は、すでに中部大学での予防的取り組みやベストプラクティス集の作成過程で考慮されているものであり、プロジェクトの方向性を裏づける貴重な知見となった。

今後は、関西・中国地方の私立大学や公立大学との個別協議を進め、それぞれの大学固有の課題や懸念を踏まえた予防的取り組みを構築し、その効果を検証する計画である。そして、得られた成果と経験をもとに、さらなる横展開を図っていく予定である。

2. 研究開発実施体制

2-1. 研究開発実施者

(1) 心理学グループ（リーダー氏名：柳澤邦昭）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
柳澤　邦昭	ヤナギサワ　クニアキ	神戸大学	大学院人文学研究科	准教授
喜多　伸一	キタ　シンイチ	神戸大学	大学院人文学研究科	名誉教授
野口　泰基	ノグチ　ヤスキ	神戸大学	大学院人文学研究科	教授
ターン　有加里ジェシカ	ターン　ユカリジェシカ	神戸大学	大学院人文学研究科	助教
浅野　樹里	アサノ　ジュリ	金沢工業大学	情報フロンティア学部	准教授
米谷　充史	コメタニ　アツシ	大和大学	社会学部	講師
田村　楓	タムラ　カエデ	神戸大学	大学院人文学研究科	大学院生
川合　渚砂	カワイ　ナギサ	神戸大学	文学部	学部生

(2) データ解析グループ（リーダー氏名：中井隆介）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
中井　隆介	ナカイ　リュウスケ	京都大学	人と社会の未来研究院	特定准教授
八田　紘和	ハッタ　ヒロカズ	University of Bath	Department of Psychology	graduate student

(3) 神経画像グループ（リーダー氏名：阿部修士）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
阿部　修士	アベ　ノブヒト	京都大学	人と社会の未来研究院	教授
浅野　孝平	アサノ　コウヘイ	大阪総合保育大学	児童保育学部	教授
寺尾　真紀	テラオ　マキ	京都大学	人と社会の未来研究院	研究員

(4) 大規模調査グループ（リーダー氏名：中島健一郎）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
中島　健一郎	ナカシマケンイチロウ	広島大学	大学院人間社会科学研究科	教授
清水　陽香	シミズ　ハルカ	西九州大学短期大学部	幼児保育学科	講師
阿部　夏希	アベ　ナツキ	長野大学	社会福祉学部	准教授
李　受珉	イ　スミン	広島大学	大学院人間社会科学研究科	助教
神原　広平	カンバラコウヘイ	同志社大学	心理学部	助教
重松　潤	シゲマツジュン	富山大学	学術研究部人文科学系	講師
安部　主晃	アベ　カズアキ	広島大学	大学院人間社会科学研究科	准教授
戸谷　彰宏	トヤ　アキヒロ	広島大学	大学院人間社会科学研究科	特任助教
張　清源	チョウ　セイゲン	広島大学	大学院人間社会科学研究科	大学院生
謝　新宇	シャ　シンウ	広島大学	大学院人間社会科学研究科	大学院生
池田　蓮人	イケダ　レント	広島大学	大学院人間社会科学研究科	大学院生

（5） 施策実施グループ（リーダー氏名：早瀬　良）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
早瀬　良	ハヤセ　リョウ	中部大学	生命健康科学部	准教授
白石　知子	シライシトモコ	中部大学	生命健康科学部	教授
岡本　玲子	オカモトレイコ	大阪大学	医学部	教授
岡本　亜紀	オカモトアキ	岡山大学	医学部	准教授
牧瀬　英幹	マキセ　ヒデモト	中部大学	生命健康科学部	准教授
山内　星子	ヤマウチホシコ	中部大学	人文学部	准教授
佐藤　枝里	サトウ　エリ	中部大学	学生相談室 人間力創成教育院　初年次教育プログラム	教授
渡邉　素子	ワタナベモトコ	中部大学	学生相談室 人間力創成教育院　初年次教育プログラム	准教授
北岡　智子	キタオカトモコ	椙山女学園大学 名城大学 中部大学	学生相談室	非常勤カウンセラー

（6） アウトリーチ活動グループ（リーダー氏名：杉浦仁美）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
杉浦　仁美	スギウラヒトミ	近畿大学	経営学部	准教授
増井　啓太	マスイ　ケイタ	追手門学院大学	心理学部	准教授
大久保　比呂美	オオクボヒロミ	合同会社 arc design lab		

2-2. 研究開発の協力者・関与者

氏　名	フリガナ	所　属	役　職（身分）	協力内容
Emiko S. Kashima	エミコカシマ	La Trobe University	教授	社会的孤立・孤独の国際的な知見に関する助言
吉川　左紀子	ヨシカワ　サキコ	京都芸術大学	学長	大学組織の管理・運営的立場からの助言

3. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

3-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2022年9月1日	「新生活に伴う孤独リスクの可視化と一次予防」プロジェクト公開研究会	「新生活に伴う孤独リスクの可視化と一次予防」プロジェクト	広島大学（ハイブリッド開催）	71名	本プロジェクト内容の概要を参加者に紹介した上で、2つの研究（経験サンプリング法を用いた研究結果、多大学参画型 Web 調査）について報告した。社会的孤立・孤独の問題と対策についてさまざまな視点から議論を行った。
2023年3月11日	日本心理学会公開シンポジウム「誰一人取り残さない」社会の実現のために心理学者が考える「持続可能な開発目標(SDGs)」第3回『孤独について考える』	日本心理学会（RISTE共催）	オンライン開催	585名	本プロジェクト内容の概要を参加者に紹介した上で、多大学参画型 Web 調査の結果について報告した。研究者以外のさまざまな属性の聴衆が参加し、多くの質問が寄せられた。
2024年1月31日	若者の孤独・孤立の原因を探る	中部大学生命健康科学研究所	中部大学	50名程度	本プロジェクトに協力している大学機関に対し、これまでの研究成果（フィードバックを含む）の進捗状況や課題等を共有し、今後の進め方について説明した。

2024年9月7日	日本心理学会第88回大会公募シンポジウム、孤独・孤立の予防に基礎研究は貢献できるのか？	伊藤文人・柳澤邦昭	熊本城ホール	100名程度	本シンポジウムでは、「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防」プロジェクトの研究代表やメンバーとともに、心理学や神経科学が、孤独・孤立のメカニズム解明や一次予防にどのように貢献できるのかについて議論し、現状の研究成果や課題等について共有した。
2025年2月27日	大学新入生の孤独・孤立を理解し、組織的介入のあり方を探る～大学入学前後に着目した縦断調査と中部大学での全体調査より～	中部大学生命健康科学研究所	中部大学	50名程度	本プロジェクトに協力している大学機関に対し、これまでに得られた研究成果とそのフィードバック結果を共有した。あわせて、得られた結果を踏まえ、各大学における支援体制や組織的介入の方向性、今後の共同研究の進め方について意見交換を行い、今後の展開方針を共有した。
2025年5月31日	名古屋社会心理学研究会2025年度第1回研究会、大学新入生の孤独・孤立を理解し、組織的介入のあり方を探る～大学入学前後に着目した縦断調査と大学での全体調査より～	名古屋大学大学院教育発達科学研究科社会心理学教室	名古屋大学	20名程度	大学入学前後に着目した縦断調査と特定の大学での全体調査によって得られた研究成果を共有するとともに、それに基づく組織的介入のあり方について参加者と議論した。
2025年10月12日	日本ピア・サポート学会第23回研究大会・下関大会ワークショップ、社会心理学からみたピア・サポート：	日本ピア・サポート学会下関大会実	DREAM SHIP（下関市生涯学習プラザ）	25名程度	まず、社会心理学の目的や基本的考え方、ソーシャル・サポート研究の成果を紹介した。さらに、大学入学前後に着目した縦断調査と特定

	若者の孤独・孤立調査より	行委員会			の大学での全体調査によって得られた研究成果を共有したうえで、参加者の所属先でどのようなピア・サポートが可能か、実施するうえでのボトルネックは何かを共有しつつ、参加者全体で議論を行った。現在、希望した参加者と、各所属先での横展開について協議を進めている。
2026年3月30日	「新生活に伴う孤独リスクの可視化と一次予防」プロジェクト成果報告会	「新生活に伴う孤独リスクの可視化と一次予防」プロジェクト	広島大学(ハイブリッド開催)	20名程度	本研究会では、2021～2025年度に実施してきたプロジェクトの概要を参加者に紹介し、研究成果の共有に加え、その実用化や他大学・他機関への展開を見据えた議論の場として、クローズドな形式で実施した。社会的孤立・孤独の問題と対策について、実務的観点を含めた多角的な意見交換が行われた。

3-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

なし

(2) ウェブメディアの開設・運営

・孤独リスクの可視化と一次予防、https://www.younglonelinesss.com、2025年7月28日

(3) 学会（3-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

・中島健一郎、研究井戸端トーク5（心のやすらぎをもとめて～孤立・トラウマ・お金～）、「こころのやすらぎを求めて：新生活に伴う孤独リスクの可視化と一次予防」、2021年12月13日、広島大学（ハイブリッド）

・柳澤邦昭、Well-being研究会キックオフシンポジウム ～人のこころの豊かさ・幸福を求めて～、「社会的つながりに根ざした心の豊かさ」、神戸大学（オンライン）、2022年3月1日

・柳澤邦昭、「ひとり」×「つながり」×「ささえあい」～若者の孤立・孤独をみんなで考える～、大学生の孤立・孤独の一次予防を考える、2024 年 3 月 4 日、東京大学
・柳澤邦昭、孤立・孤独の神経科学、「心の哲学」研究部門第 21 回研究会、2024 年 10 月 12 日、玉川大学
・柳澤邦昭、神戸大学高等学術研究院シンポジウム、孤独に陥るメカニズムを探る：個と集団の関係性に基づくアプローチ、2024 年 10 月 21 日、神戸大学
・柳澤邦昭、第 17 回 CS 講演会、楽観的な人は、同じように未来を描く、2025 年 9 月 8 日、東北大学（オンライン）
・柳澤邦昭、追手門学院大学心理学研究科講演会、世界の捉え方と社会的つながりの関係、2026 年 3 月 10 日、追手門学院大学（オンライン）

3-3. 論文発表

（1）査読付き（　1　件）

●国内誌（　1　件）

・柳澤邦昭・阿部修士、社会神経科学が解き明かす共有された現実と社会的つながり、心理学評論、68、30-42、2025 年

●国際誌（　2　件）

・Kambara, K., Toya, A., Lee, S., Shimizu, H., Abe, K., Shigematsu, J., Zhang, Q., Abe, N., Hayase, R., Abe, N., Nakai, R., Aoki, S., Asano, K., Asano, R., Fujimura, M., Fukui, K., Fukumoto, Y., Furutani, K., Hasegawa, K., Hashimoto, H., Hashimoto, M., Hosogoshi, H., Ikeda, H., Ishioka, T., Ito, C., Iwano, S., Kamada, M., Kanai, Y., Karita, T., Kasagi, Y., Kashima, E. S., Kato, J., Kawachi, Y., Kawahara, J., Kimura, M., Kira, Y., Kiyonaga (Sakoda), Y., Kohguchi, H., Komiya, A., Masui, K., Midorikawa, A., Mifune, N., Mizukoshi, A., Nawata, K., Nishimura, T., Nogiwa, D., Ogawa, K., Okada, J., Okamoto, A., Okamoto, R., Sasaki, K., Sato, K., Shimizu, H., Sugimura, A., Sugitani, Y., Sugiura, H., Sumioka, K., Sunaguchi, B., Takebe, M., Tanabe, H. C., Tanaka, A., Tanaka, M., Taniguchi, J., Tokunaga, N., Tomita, R., Ueda, Y., Yamashita, T., Yamaura, K., Yogo, M., Yokotani, K., Yoshida, A., Yoshida, H., Yoshihara, K., Yoshikawa, A., Yanagisawa, K., & Nakashima, K., Can online interactions reduce loneliness in young adults during university closures in Japan? The directed acyclic graphs approach, *Asian Journal of Social Psychology*, 28(1), e12658, 2025, https://doi.org/10.1111/ajsp.12658
・Yanagisawa, K., Nakai, R., Asano, K., Kashima, E. S., Sugiura, H., & Abe, N., Optimistic people are all alike: Shared neural representations supporting episodic future thinking among optimistic individuals. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 122(30), e2511101122, 2025, https://doi.org/10.1073/pnas.2511101122

（2）査読なし（　0　件）

3-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

（1）招待講演（国内会議　1　件、国際会議　0　件）

・柳澤邦昭、社会神経科学 2.0 への誘い、日本心理学会第 87 回大会、神戸国際会議場、2023 年 9 月 15 日

（2）口頭発表（国内会議　5　件、国際会議　0　件）

・戸谷彰宏・李受珉・清水陽香・安部主晃・重松潤・張清源・神原広平・阿部夏希・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、大学生の孤独感に影響を及ぼす要因の総合的考察、日本グループ・ダイナミックス学会第 69 回大会、高知工科大学、2023 年 9 月 24 日

・米谷充史・中井隆介・八田紘和・杉浦仁美・阿部修士・柳澤邦昭、社会的受容・脅威に関わる神経表象-マルチボクセルパターン解析による検討-、日本グループ・ダイナミックス学会第 69 回大会、高知工科大学、2023 年 9 月 24 日

・米谷充史・柳澤邦昭、他者との相互作用に応じた状態孤独感の変動、日本感情心理学会第 32 回大会、大阪体育大学、2024 年 6 月 1 日

・Hatta, H., Nakai, R., & Yanagisawa, K. Lonely people post idiosyncratic pictures on Instagram、日本グループ・ダイナミックス学会第 70 回大会、立教大学、2024 年 8 月 22 日

・柳澤邦昭・中井隆介・米谷充史・八田紘和・杉浦仁美・阿部修士、社会的認知構造に孤独感が与える影響：表象類似度解析による検証、日本社会心理学会第 65 回大会、オンライン開催、2024 年 8 月 31 日

（3）ポスター発表（国内会議　27　件、国際会議　1　件）

・阿部夏希・戸谷彰宏・清水陽香・李受珉・加藤樹里・神原広平・重松潤・中島健一郎、大学生の不登校に影響を及ぼす要因の検討：病院受診の回数と欠席回数に着目した決定木分析、日本心理学会第 86 回大会、日本大学、2022 年 9 月 8 日

・神原広平・加藤樹里・戸谷彰宏・阿部夏希・李受珉・重松潤・清水陽香・中島健一郎、青年の孤独感に対する友人とのオンライン交流の影響：Directed Acyclic Graphic の推定、日本心理学会第 86 回大会、日本大学、2022 年 9 月 9 日

・戸谷彰宏・阿部夏希・李受珉・加藤樹里・神原広平・重松潤・清水陽香・中島健一郎、大学生の孤独リスクに関わる諸要因：各尺度における基礎的分析の報告、日本心理学会第 86 回大会、日本大学、2022 年 9 月 9 日

・清水陽香・戸谷彰宏・阿部夏希・李受珉・加藤樹里・神原広平・重松潤・中島健一郎、大学生の対人関係が学業成績に及ぼす影響の検討、日本心理学会第 86 回大会、日本大学、2022 年 9 月 9 日

・柳澤邦昭・杉浦仁美・嘉志摩江身子・中島健一郎・八田紘和・加藤樹里・中井隆介、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う孤独感の地域差、日本心理学会第 86 回大会、日本大学、2022 年 9 月 10 日

・中島健一郎・戸谷彰宏・阿部夏希・李受珉・加藤樹里・神原広平・重松潤・清水陽香、新生活に伴う孤独リスクの規定因を探る（1）―孤独感に影響する要因の検討―、日本社会心理学会第 63 回大会、京都橘大学、2022 年 9 月 15 日

・戸谷彰宏・阿部夏希・李受珉・加藤樹里・神原広平・重松潤・清水陽香・中島健一郎、新生活に伴う孤独リスクの規定因を探る（2）―主観的健康度に影響する要因の検討―、日本社会心理学会第 63 回大会、京都橘大学、2022 年 9 月 15 日
・戸谷彰宏・阿部夏希・李受珉・加藤樹里・神原広平・重松潤・清水陽香・中島健一郎、大学生の孤独感に影響する要因の検討、日本グループ・ダイナミックス学会第 68 回大会、立命館大学（オンライン）、2022 年 9 月 17 日-18 日
・李受珉・戸谷彰宏・清水陽香・安部主晃・重松潤・張清源・神原広平・阿部夏希・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、縦断調査による大学生の孤独リスクに関わる要因の検討（1）―孤独感に着目した個人要因と集団（大学）要因の影響―、日本心理学会第 87 回大会、神戸国際会議場、2023 年 9 月 15 日
・戸谷彰宏・李受珉・清水陽香・安部主晃・重松潤・張清源・神原広平・阿部夏希・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、縦断調査による大学生の孤独リスクに関わる要因の検討（2）―孤立指標に着目した個人要因と集団（大学）要因の影響―、日本心理学会第 87 回大会、神戸国際会議場、2023 年 9 月 15 日
・神原広平・戸谷彰宏・李受珉・清水陽香・安部主晃・重松潤・張清源・阿部夏希・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、DAGs で作成したモデルは将来の青年の孤独感を予測するか？、日本心理学会第 87 回大会、神戸国際会議場、2023 年 9 月 15 日
・阿部夏希・中井隆介・戸谷彰宏・李受珉・清水陽香・神原広平・安部主晃・重松潤・張清源・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、孤独感を予測する要因の検討、日本心理学会第 87 回大会、神戸国際会議場、2023 年 9 月 16 日
・戸谷彰宏・李受珉・清水陽香・安部主晃・重松潤・張清源・神原広平・阿部夏希・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、大学生の孤独リスクに関わる個人・集団レベルの縦断調査研究 ―基礎的分析の報告―、日本社会心理学会第 64 回大会、上智大学、2023 年 9 月 7 日
・杉浦仁美・柳澤邦昭、孤立・孤独に対する社会的スティグマの検討、日本社会心理学会第 64 回大会、上智大学、2023 年 9 月 7 日
・戸谷彰宏・李受珉・清水陽香・安部主晃・重松潤・張清源・神原広平・阿部夏希・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、社会的・経時的比較はソーシャルサポート人数と孤独感の関連を強めるか、日本グループ・ダイナミックス学会第 70 回大会、立教大学、2024 年 8 月 23 日
・清水陽香・安部主晃・阿部夏希・戸谷彰宏・李受珉・重松潤・張清源・神原広平・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、大学生活におけるソーシャル・キャピタルと精神的健康の関連、日本グループ・ダイナミックス学会第 70 回大会、立教大学、2024 年 8 月 23 日
・戸谷彰宏・李受珉・清水陽香・安部主晃・重松潤・張清源・神原広平・阿部夏希・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、孤独とソーシャルサポートにおける個人内関係の検討――ランダム切片交差遅延パネルモデル（RI-CLPM）による分析――、日本心理学会第 88 回大会、熊本城ホール、2024 年 9 月 7 日
・戸谷彰宏・李受珉・清水陽香・安部主晃・重松潤・張清源・神原広平・阿部夏希・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、縦断データを用いた孤独感に影響する諸要因の検討――2022 年度データ（戸谷他，2023）の追試検討――、日本社会心理学会第 65 回大会， オンライン開催、

2024年9月19日-10月3日
・李受珉・戸谷彰宏・清水陽香・安部主晃・重松潤・張清源・神原広平・阿部夏希・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、環境の変化が学生の孤独感と精神的健康に及ぼす中期的影響：多母集団 RI-CLPM を用いた分析、日本社会心理学会第65回大会，オンライン開催、2024年9月19日-10月3日
・杉浦仁美・柳澤邦昭、孤立・孤独に対する社会的スティグマの検討（2)、日本社会心理学会第65回大会，オンライン開催、2024年9月19日-10月3日
・神原広平・戸谷彰宏・李受珉・清水陽香・安部主晃・重松潤・張清源・阿部夏希・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、反すうの抽象的処理様式はトランジション中の青年の孤独感を強める、日本青年心理学会第32回大会、札幌学院大学、2024年11月9-10日
・Kometani, A., & Yanagisawa, K. Does state loneliness promote behavior to reconnect with others? The Society for Personality and Social Psychology, Denver, 2025, February 22
・謝新宇・戸谷彰宏・李受珉・神原広平・清水陽香・池田蓮人・張清源・安部主晃・阿部夏希・重松潤・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、反すうするほど孤独感が高まる？：多変量潜在変化得点モデルを用いた検討、日本グループ・ダイナミックス学会第71回大会、弘前大学、2025年8月22日
・戸谷彰宏・李受珉・神原広平・清水陽香・謝新宇・池田蓮人・張清源・安部主晃・阿部夏希・重松潤・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、孤独感と人生満足度は双方向的な影響を持つか―戸谷他(2024)の縦断調査データを用いた検討―、日本心理学会第89回大会、東北学院大学、2025年9月6日
・池田蓮人・李受珉・上田寛・小桝真呼・中島健一郎、反すうの種類と睡眠の質の相互的な影響― 戸谷他(2024)の縦断データを用いた検討―、日本心理学会第89回大会、東北学院大学、2025年9月7日
・池田蓮人・李受珉・上田寛・小桝真呼・中島健一郎、孤独感が入眠困難に及ぼす影響―中頻度縦断データを用いた検討―、日本社会心理学会第66回大会、東京大学、2025年9月20日
・戸谷彰宏・李受珉・神原広平・清水陽香・謝新宇・池田蓮人・張清源・安部主晃・阿部夏希・重松潤・早瀬良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎、孤独感を低減させる大学の取り組み調査、日本社会心理学会第66回大会、東京大学、2025年9月21日
・李受珉・池田蓮人・上田寛・小桝真呼・中島健一郎、潜在プロファイル分析を用いた孤独感の変化に関する考察―戸谷他（2024）の縦断データを用いて―、日本社会心理学会第66回大会、東京大学、2025年9月21日

3-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

（1）新聞報道・投稿（　13　件）

AJSPに掲載されたKambara et al.(2025)の論文に関して、下記に代表的な掲載例を示す。
・朝日新聞（2025/01/27)「コロナ禍で閉鎖した大学　オンライン交流では学生の孤独感減らず？」，https://digital.asahi.com/articles/AST1Q44FCT1QPLBJ006M.html
・朝日新聞（2025/03/03）「（ぶらっとラボ）オンラインだけでは孤独感？」，

https://digital.asahi.com/articles/DA3S16162033.html
・日本経済新聞（2025/03/10）「ネット交流、孤独減らず？コロナ禍の大学生調査」，https://www.nikkei.com/article/DGKKZO87225830Q5A310C2CE0000/

PNAS に掲載された Yanagisawa et al.(2025)の論文に関して、下記に代表的な掲載例を示す。
・Nature News (2025/07/22) “The optimistic brain: scans reveal thought patterns shared by positive thinkers”, https://www.nature.com/articles/d41586-025-02302-6
・The Guardian (2025/07/21) “Optimists share similar brain patterns when thinking about the future, scans show”, https://www.theguardian.com/science/2025/jul/21/optimists-share-similar-brain-patterns-when-thinking-about-the-future-scans-show
・The Times (2025/07/21) “Optimists all on same wavelength, but no two pessimists are alike”, https://www.thetimes.com/uk/science/article/optimists-all-on-same-wavelength-but-no-two-pessimists-are-alike-bn5wtr3mt
・Scientific American (2025/07/21) “Optimists Are Alike, but Pessimists Are Unique, Brain Scan Study Suggests”, https://www.scientificamerican.com/article/optimists-are-alike-but-pessimists-are-unique-bran-scan-study-suggests/
・日本経済新聞（2025/07/22）「神戸大と京大、楽観的な人々は未来を想像する際に類似した情報処理を行っていることを解明」，https://www.nikkei.com/article/DGXZRSP694254_S5A720C2000000/
・日刊工業新聞（2025/07/23）「『楽観的』は認知構造が類似　神戸大など、脳の働き可視化」，https://www.nikkan.co.jp/articles/view/00755405
・Forbes JAPAN(2025/07/31)「なぜ悲観的な人は孤立しがちなのか――脳活動パターンから解き明かす」，https://forbesjapan.com/articles/detail/80905
・科学新聞 第 4031 号（2025/08/08，6 面）「楽観的な人の脳が描く似たような未来予想図」
・朝日新聞（2025/09/07）「楽観的な人はなぜ人間関係を築きやすい　脳可視化し思考パターン解析」，https://digital.asahi.com/articles/AST911P8PT91UTFL009M.html
・朝日新聞（2025/09/29）「（ぶらっとラボ）楽観的な人、似た未来描く？」，https://digital.asahi.com/articles/DA3S16312889.html

(2) 受賞（　7　件）
・日本心理学会第 86 回大会優秀発表賞、「新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う孤独感の地域差」、2022 年 10 月（受賞者：柳澤邦昭・杉浦仁美・嘉志摩江身子・中島健一郎・八田紘和・加藤樹里・中井隆介）
・神戸大学 令和 5 年度優秀若手研究者賞、2023 年 6 月（受賞者：柳澤邦昭）
・日本心理学会国際賞奨励賞、2023 年 9 月（受賞者：柳澤邦昭）
・日本グループ・ダイナミックス学会第 70 回大会で優秀学会発表賞（English Session 部門）、2024 年 9 月（受賞者：八田紘和・中井隆介・柳澤邦昭）
・神戸大学学長表彰（財務貢献）、2024 年 10 月（受賞者：柳澤邦昭）
・神戸大学学長表彰（財務貢献）、2025 年 10 月（受賞者：柳澤邦昭）

・日本心理学会第 89 回大会優秀発表賞、「孤独感と人生満足度は双方向的な影響を持つか―戸谷他(2024)の縦断調査データを用いた検討―」、2026 年 3 月（受賞者：戸谷彰宏・李 受珉・神原広平・清水陽香・謝 新宇・池田蓮人・張 清源・安部主晃・阿部夏希・重松 潤・早瀬 良・杉浦仁美・阿部修士・中井隆介・柳澤邦昭・中島健一郎）

（3）その他（　3　件）

・高校生のための進学サポートサイト テレメール進学、「「孤立・孤独」を社会から無くすには」、https://telemail.jp/shingaku/academics-research/lecture/g013627

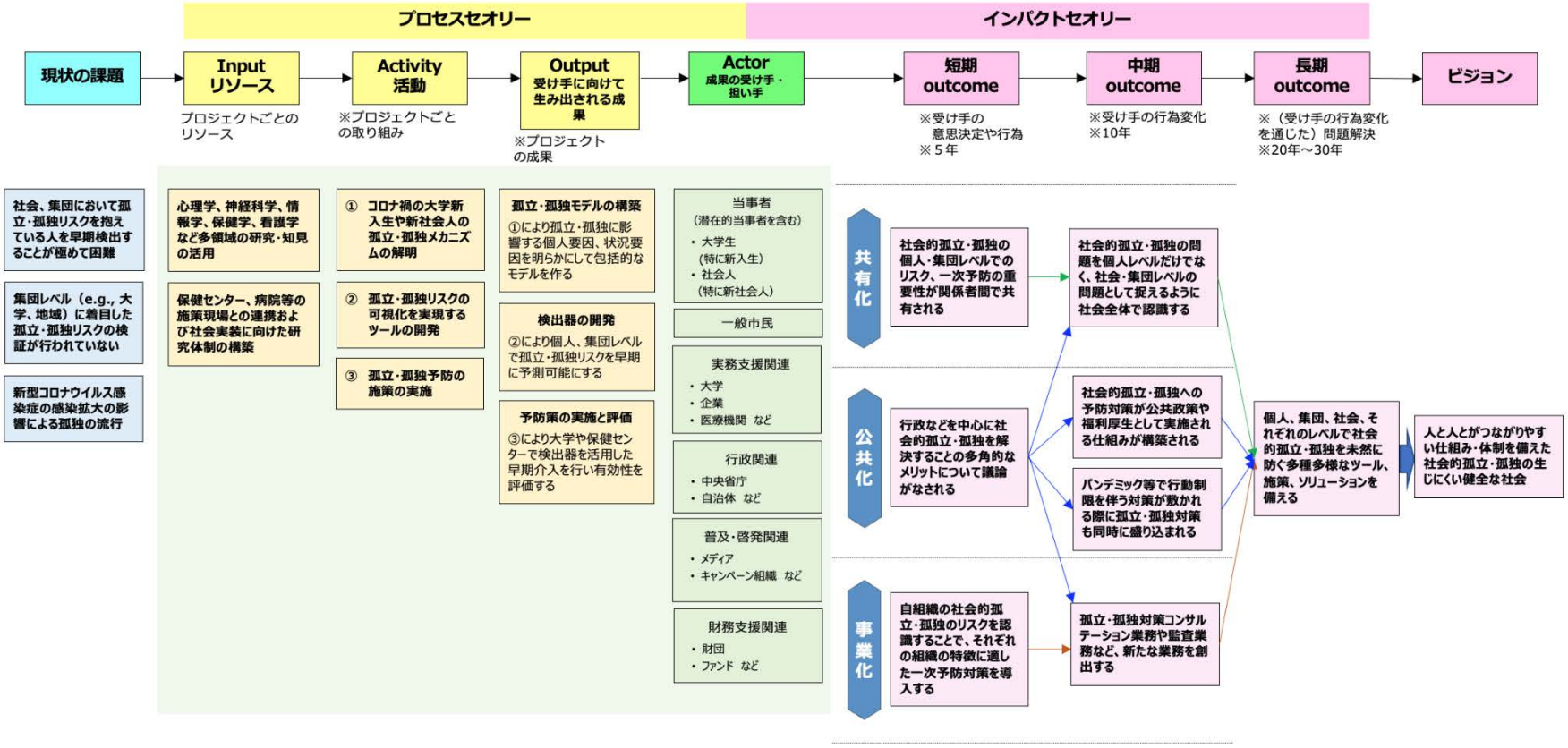
・同志社大学プレスリリース（2025 年 1 月 21 日）「大学閉鎖時のオンラインでの対人交流は大学生の孤独感の低減には効果的でない可能性」（AJSP 掲載の Kambara et al. (2025)の論文関連）、https://www.doshisha.ac.jp/news/detail/001-LvKGas.html

・神戸大学・JST 共同プレスリリース（2025 年 7 月 22 日）「楽観的な人々は似たような未来を思い描く― 楽観性に共通する脳の働きを可視化」（PNAS 掲載の Yanagisawa et al. (2025)の論文関連）、https://www.kobe-u.ac.jp/ja/news/article/20250722-66828/

3-6. 知財出願【出願件数のみ公開】

（1）国内出願（　0　件）

（2）海外出願（　0　件）

4. ロジックモデル

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）
「新生活に伴う孤独リスクの可視化と一次予防」ロジックモデル